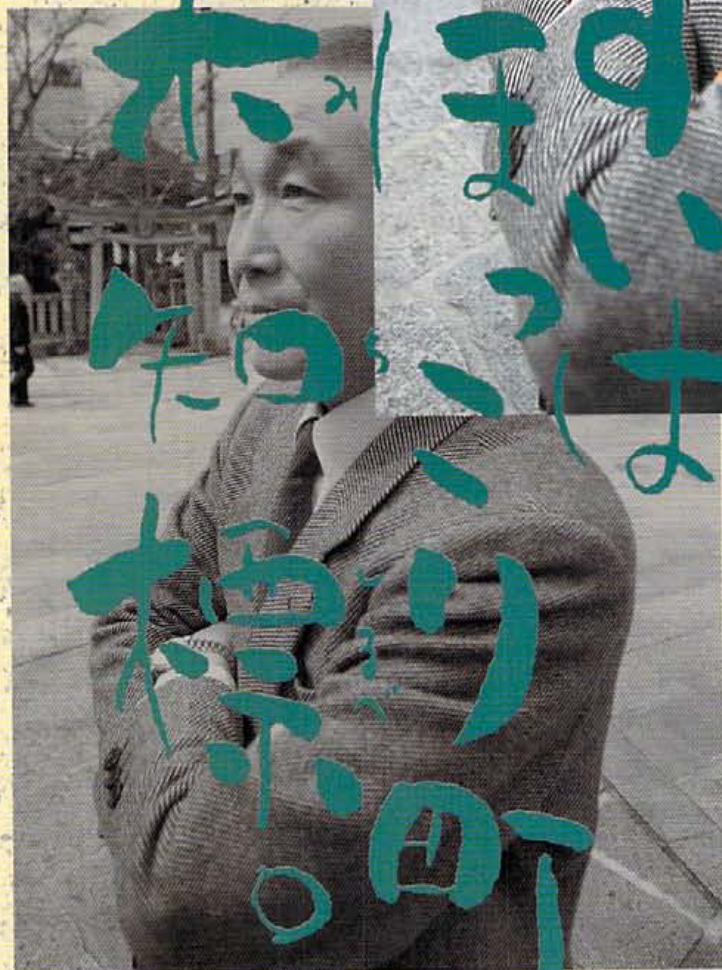


柳 國雄
滋賀県出身。昭和十六年生まれ。二十六歳でこの世界に入る。それまではサラリーマンだったとのこと。現在の店舗に移ったのは昭和五十三年。京都美術倶楽部会員。兄弟四人がすべて古美術品を扱う。



第四十四弾 国雄さんの憧れた町・新門前通り編

京都市東山区の新門前通り界限には、アンティークショップがたくさんある。それらの店をよく見て回る人なら気づいているかも知れない。そう、この辺りには「柳」という古美術商が四軒もあるのだ。実は、これらの店舗は滋賀県出身の四人の兄弟がそれぞれ独自に経営している。今回はその古美術商四兄弟のひとり、柳国雄氏の登場である。



柳氏の店先



店の前に立つ柳氏



柳氏の店先



付近のお稲荷さんで



次兄のお宅にて



新門前通りを散策する柳氏

京都市東山区の新門前通り界隈には、アンティークショップがたくさんある。店構えの表情もさまざまだ。いかに骨董品店らしい雰囲気から、ちよつと高級すぎてるのぞくには躊躇しそうな店まで、千差万別である。

それらの店をよく見て回る人なら、多分気づいているかも知れない。そう、この辺りには「柳」という古美術商が四軒もあるのだ。それも歩いて五分くらいの区画に集中している。

実は、これらの店舗は滋賀県出身の四人の兄弟がそれぞれ独自に経営している。今回はその四兄弟のひとり、柳國雄氏の登場である。さっそく氏の店を訪れた。純和風の落ち着いた雰囲気。そこには、信楽や備前の壺、天目茶碗や経筒がさり気なく飾ってある。このような品の値打ちは目見当がつかない。だが、〇万、〇〇万ではとても買えないだろうと想像がいった。取材でなければ入ることはまず無いただろうそんな店内に柳氏が立っている。

特に特徴があるわけではない。が、柳氏は初対面でも非常にリラックスできる、人をさらさない雰囲気をもっていた。丁度な物腰で、門外漢の若僧ライターの不敏な質問にも親切に答えてくれる。ただひとつ、時折その笑顔の合間にひかる眼光の鋭さに、少なからず注意をひかれた。これは、後で他の二兄弟に出会ったときにもおなじことを感じた。國雄氏は「男で、長兄、次兄を紹介いただいたのだが（四男は海外へ出て不在だった）、いずれもたまたものでは無い眼光の鋭さを柔和な表情の中に秘めている。

長兄の店では、素晴らしい印象のコレクションを紹介していた。また、次兄の店では、なんと浦上玉堂の掛軸を見ることができるといふ恩恵にもあずかった。かつて川端康成がよく出入りしたというその店内でも、もはや希少な玉堂の実物が現れるとは……興味無い方には恐縮だが、筆者は備前出身で自由気儘に絵を描きつづけたこの江戸時代の人物に大変興味がある。

卑しいほど、目につく品は手あたり次第に値段を尋ね、その価格に驚いたり、ため息をついたり連続だった。しかし、もっとも興味をひかれたのは、どうすれば真贋を見極めるようになるのか、ということだ。柳氏は「十六歳になるまでサラリーマンだったという。いわば途中からこの世界に転入したわけで、そういう意味では素人にもわかりやすく説明してもらえそうなきがした。だが、答えは他の二兄弟とおなじく「取をみることです」なのである。何度聞いても氏は笑いながらそう答えた。「取をみる間にわかってくるんです」。そういうものだろうか？ そんなやりとりをしている間に、柳氏はこんな話を語ってくれた。

「韓国に金板経という、金の板に経を彫った珍品がある。その金板経と日本の経筒（銅製の丸筒）貴、この中に経を入れた、これを私の処へ持ってきた人がいた。見た瞬間、あ、これは二セモノや！」とわかりました。でも持ち主はホンモノだと信じこんでいる。すぐに突き返すのは失礼ですから、一応、おもむろに取り出して眺めるフリをしたのです。触るまでもなくだめなんですが、たしかにホンモノだったらすゴイ。でも、だいたいは金板経と重量があるものでしょう。それが、ブリキのようにバリバリしてる。素人さんにはそんなことさえ判らないのかなあ、と思いました。た

すいば の しりとり 町 の 未知標



「自分で扱った品が、何年か経つてもずっと値段が上がったり、値打ちがつくことがある。そういうとき、その品は「出世した」という。これは嬉しいです。ああ、よかったと思います。出世して専門書や美術書に掲載されたり、値打ちがあがったりするのを知ったときは、ほんとりに嬉しいですよ」



だ、昔そのニセモノが出た当時に、某新聞社がはしゃいで、億円くらいの価値があるというように記事を掲載したらしいのです。持ち主はその記事がすつと頭の中にあっただけで、私は早くから、韓国でつくられたニセモノが出回っている、ということを知っていましたから、それをみたときにもすぐに判りました。経筒もおなじです。びかびかの経筒でホンモノだったら国宝級。どうやら金板経と経筒の両方で五億円か六億円くらいにはなると思っていちゃったようです。そういうことを最後、店を出ていく間にホンッと眠っていかれましたから。大きなトラックに品物を入れて来られてましてねえ。帰りはそのトラックに札束をぎっしり詰めて帰るつもりだったでしょう。」

こうした持込みの場合、失礼ならぬよう、ニセモノでも丁寧にあつかうのだという。それからおもむくに、ウチでこれを取り扱うのは、ちょっとむづかしいみたいですね。

といてみる。その時、理由を尋ねられれば、ボチボチと説明してゆく。ただ、あくまで表現はやわらかく、ニセモノだとは間違ってもいわない。これは「写しモノ」です。ちなみに、このテの持込みでホンモノがあったことはまだないそうです。

こうした話の他にもさまざまの掛軸や、資料、縄文土器や朝鮮の器などの実物や写真を手には話はずきなかつた。これまで多種多様な数えきれない古美術品を扱ったそうだが、柳氏にとって、思い出の逸品があるとすれば、それはどんな品なのだろう。氏は一枚の写真をとりだしてこんなことを語った。

「これは雲中供養仏といいます。平等院にあるものとおなじです。写真の私は幾度も修理を受けています。江戸時代中期に着色されていた。もとの仏像の上から紙を貼って、着色がしてあった。その状態だと、正直言ってどれほどの値打ちのものなのかは判断つきかねました。ただ、もしホンモノの雲中供養仏だったら、一生に一度の大当りです。それはごほごほになった着色を剥がしてみればたしかめられる。手に入れてからどうしようかなあ、と悩みましたよ。中身が予想どおりでなかつたらおしまいです。で、学者に相談してみた。この着色、剥がしてみようと思っけらどうやら……ってね。するとその先生も、とってみいな、といわれた。剥がしてみると……見事に当時のままの仏身が現れたのです！民間で雲中供養仏を所持する例を、私は他に知りません。こんなのは一生に一度、扱えるかどうか：感激でした」

真贋の森は深く暗い。しかし、その森をくぐり抜けた先には眩しい古美術の原野がひろがる。そこには、到達した者のみを知るよろこびがある……

ところで今回は何が「すいば」なのか？ここで柳氏の次の言葉をもつて結びとくことにしよう。

「自分で店をもつならこの界隈だと思っていました。同業者も多いこの地に憧れてもいました。ですから、今の店をもつことが出来たときは感慨深かったです。若いころ夢みた場所でしたから。骨董や古美術を買う人にとって、また商う者にとってこの新門前はピカ一の「すいば」なのです」